

論文の和文概要

氏名 薄井好人

(博士論文の題目)

小学生の遠投能力向上を促すカリキュラム開発の課題の検討

(博士論文の概要)

平成29年3月に告示された小学校学習指導要領解説体育編(文部科学省, 2017)では, 児童の遠投距離の低下傾向が引き続き深刻であることに鑑み, これまで走・跳の運動で構成されていた陸上運動系領域において新たに「投の運動」を加えて指導できることとなった。

しかし, 新学習指導要領は, 遠投距離向上に向けた指導の必要性を指摘したが, 指導すべき投動作の技術的課題を提示したわけではない。そのため, 投動作の技術的課題の何を, どのように指導すればいいのかを検討するエビデンスが早急に求められている。

遠投距離の向上を求める場合, カリキュラム内にどのような投動作の技術的課題を, どのように指導し, その結果としてどの程度の達成度を求めるのかを一定の根拠に基づき, 決めていくことが必要となる。

そこで, 本研究では, 体育の授業において遠投距離の向上のために指導すべき投動作を発達の段階に即して明らかにし, 遠投距離改善を意図したカリキュラムの開発に向けた示唆について検討することを目的とした。

その際, 以下の二つを下位課題として設定した。

研究課題Ⅰ. 縦断的データを用いた小学生の遠投距離の推移の検討

研究課題Ⅱ. 遠投距離に影響を与えている技術的課題の検討

研究課題Ⅰは, ソフトボール投げの遠投距離に関する縦断的データを用いて児童の遠投距離の変容過程を, 学年進行並びに性差を踏まえて検討することを目的とした。

対象は, 小学校1年生から6年生までの遠投距離のデータが収集できた児童277名(男子122名, 女子155名)であった。また, この目的達成に向け, 1)身体的特性が遠投距離に与える影響, 2)1年生時点の遠投距離が6年生時点の遠投距離に与える影響並びに 3)学年進行が遠投距離に与える影響を検討した。

その結果, 次の3点が示唆された。

- 1)身体的特性は遠投距離に影響を与えていないこと。
- 2)児童は学年進行に伴い, 遠投距離を向上させていること。
- 3)小学校入学前の遠投距離が下位群の5年生以降の遠投距離に影響を与えていること。

また, これらは, 児童の遠投距離の改善の時期に関して以下の二つの時期を想定することが必要になり, 各々の時期に即した指導内容と指導方法の検討が求められることを示唆して

様式3号

いた。

- 1) すべての児童を対象に遠投距離の停滞現象を抑制するための予防的措置を優先する小学校入学前（幼稚園児）の時期
- 2) 遠投距離の停滞現象を起こしている児童への重点的な対応である処方的措置が中心となる小学校5年生以降の時期

研究課題Ⅱは、ソフトボール投げの遠投距離に寄与する投動作を、小学校6年生を対象にして男女別に明らかにすることで遠投距離の向上に貢献する技術的課題を明らかにすることを目的とした。

対象児童は、体育の授業で遠投距離向上に向けた特別な指導を受けていない小学校6年生児童171名（男子95名、女子76名）であった。対象児童のソフトボール投げの記録が用いられた。また、投動作がビデオ撮影され、撮影された映像は滝澤・近藤が開発した評価法（2017）を用い、トレーニングされた分析者により分析された。その結果、次の3点が示唆された。

- 1) 構え・足の踏み出し、反対側の腕（突き出し）、投げ手側の腕（伸展）と直線の傾き（後傾）の3つの技術的課題が、男子の遠投距離に影響を与えていた。
- 2) 反対側の腕（突き出し）、投げ手側の足（移動）、投げ手の腕（リリース）、並びに投げ手側の腕（伸展）と直線の傾き（後傾）の4つの技術的課題が、女子の遠投距離に影響を与えていた。
- 3) 投げ手側の腕（伸展）と直線の傾き（後傾）並びに反対腕の突き出しの2つの技術的課題が、男女双方の遠投距離に影響を与えていた。

本研究の前提条件は、遠投距離を向上させていくためにいつ、何を、どのような順序で学習していくことが必要になるかを示したカリキュラムが存在していないということであった。そのためこのようなカリキュラムが存在していない児童を対象にした今回の調査で得られた知見は、カリキュラムの不在による体系的な指導の不足により起こっている現象だと考えられる。また、本研究の対象となった児童は、遠投距離を向上させるカリキュラムを踏まえた指導を受けていない児童であったことを考えると、旧学習指導要領のもとで体育の授業を受けた児童には、このような現象が発生していると考えられる。

そのため今回の知見は、限られたものとはいえ、投動作に関して指導すべき特定の技術的課題と学年を特定していくための手がかりを与えるものと考えられる。

今後は、この知見を踏まえた遠投距離改善に向けたカリキュラムを仮定的に設定し、その妥当性を介入実験を通して検証していくことが求められる。今後の課題としたい。